

雑誌「遠鳴」(東京大学蔵)

令和4年6月5日(日)13:00~14:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

1. はじめに

雑誌「遠鳴」の明治42年発行の18号から28号までの1年分11冊が別子銅山記念館にあったので「昔話」、「別子東延合宿所特色」などを令和元年度に解説した。その後、愛媛県立図書館に明治42年~44年の雑誌「遠鳴」が16冊現存するのが分かったので、「昔話のつづき」「四阪嶋製錬所作業梗概」「明治初年前後ノ別子銅山採掘法」「別子生吹製錬法」などを、令和2年度に解説した。そして、東京大学大学院法学政治研究科附属の近代日本法政センターでも明治42年~大正2年の雑誌「遠鳴」が35冊現存するのも分かったので、令和3年度に解説する予定を立てた。しかし、同センターが耐震工事にはいって閉館してしまったために、資料の入手が出来なくなってしまった。令和3年夏に再開となり、別子銅山記念館蔵、愛媛県立図書館蔵に続き、未読の雑誌「遠鳴」を別子銅山や山での生活が垣間見られる箇所を綴ってみる。100年前の雑誌を三度び手に取って読んでいることが奇跡的である。

別子銅山図書館には、別子銅山記念館、愛媛県立図書館、東京大学が所蔵していた44冊を収蔵することとなった。

※雑誌「遠鳴」 住友家に奉じた退職者・現職者の傭員・準備員の文筆を楽しむ人による遠鳴会が発行する雑誌。発行日は不規則で毎月1回発行する。事務所は東平にあるが、数名の傭員が分担しているので定まった事務所はない。会員となる希望者は電話または郵便で会員の誰かに申込連絡をすればよい。これは一山一家ならではである。会費は月10銭で、6ヶ月分前払い。掲載記事は、業務上の利益となるべき記事、詩歌、俳諧、短編小説、小品文、数学問題、一口笑話、都々逸、考え物、育児法、食物料理法等。

要するに文学娯乐的または家庭の利益なる記事。ただし、事の政論、住友家に対して不平ケ間敷事、風俗を乱す怖れの記事は没書とする。編集・印刷は尾道市で行っていた。

山神祭余興(21号)

住友鉱業所に於いては、例に依るって来る五月一二三の三日間に山神祭を執行せらるる筈なねが、今ね其の余興しとしの計画を聞くに、別子・東平・四阪嶋及び西之川は何れも芝居興行のあることは例年に変わりなきも、新居浜に於いては総開・西条間往復二十哩十八鎖のマラソン競走をなすことに定め選手は何れも労働者より二十名選抜し十組に分って

競争せしめ。第一着者に金参拾円、以下夫々賞金を贈与するの計画なりとか。

42号

目次の横に、牧相信と新井琴次郎の写真が掲載されている。

日浦坑道(43号)

あらゐ

第三通洞は東平の字「第三」より東南に向ひ約半里、即ち六千尺進みて八番坑道の中央に行逢ふ。之より同坑道東走約二千三百尺進みて引立、即ち坑道の行詰りとなる。此点は別子小足谷の下流と日浦谷との会点を距る四千三百尺なり。先年、当鉱山水力電気の問題起こるとき、別子方面の水を坑内に取込み第三坑口に導き、上部鉄道下の絶壁を横に導き、石ヶ山丈より端出場に落さんと決し、明治四十一年九月之に着手し、日浦及び八番坑道引立の両方より掘進み、今年二月八日首尾よく貫通せり。大工事の一段落として慶賀の至なり。此坑道は単線電車道にて、一方に水路の溝を切る。而して八番坑道東走と第三通洞とは坑道内に水を流すに非ずして、之に平行せる水道を別に掘るものとす。其の工事及び坑外諸工事は目下進行中にて、今年中には大方出来上るべき都合なり。

※今年=明治44年

	1795m		175m		2020m
※東平と日浦の連結	第三通洞	+	東延斜坑底先走	+	日浦通洞
水路	通洞の隣にトンネル				通洞内に溝を設置

銅鉱床部は大きく迂回

五観偈並に三匙偈 (45号)

鷲尾勘解治

此れは禅宗の僧侶が食事の時分に読むお経の一つである。其の意味は誠に結構な有り難いお経です。自分は此れを知って居っても実行が甚だ乏しいから、此れを諸君に御紹介申して、実行を願ひたいのである。注釈は自分の私見であつて釈尊は御意思は百が一も表すことが出来ません。此れが為めに却つて其の御趣旨を破壊したかも知れません。大方諸君の御叱正を願ひたいものである。

五観偈

一許功多少量彼来慮(一つには功の多少を許り彼の来慮を量る)

ご飯の効能は多いものであるか、少ないものであるか。此の御飯が吾々の口に入るまでには、如何にして出来たものであるか。容易く出来たものであるか。又は百姓其の多くの人々が汗水を垂らして出来たものであるから。吾々は毎々御飯を頂く前に其の効能

の多少を計って見、其の如何にして出来たかを量って見るがよい。吾々は一粒一飯も粗末には出来ない。然るに吾々が台所にて米麦を洗う時に粗漏に扱ふて此れを流したり、御飯粒を粗末にしたりするのは何によりの不陰徳である。自分が大徳寺の芳春院にて広州禅師について居た時に典座と云ふて台所勤務を仰せ付て居た。自分は横着であつたから飯煮をしても、或いは米を流したり、或いは焦げつかしたり、或いは堅くなつたり柔らかくなつたりして何うも適当に煮けなかつた。又晩茶を出しても濃ひ過ぎたり薄過ぎたりして何うも晩茶も出花と云ふ塩梅には行かなかつた。又沢庵を出しても、或いは多く出し過ぎたり、或いは切り方が多き過ぎたりして、何うも適当には行かなかつた。すると禅師は之を見る度毎に「其れは米なり、晩茶なり、沢庵なりの効用を殺すと謂ふものじゃ。此れは不陰徳の甚だしきものである。農夫が汗水を垂らして作ったものを殺して使ふとは何事ぞ。物は殺活を明らかにすることが肝腎じゃ。典座は陰徳を積むに最も便利なる所であるから、有り難く思うて注意をしなければならん。」と幾度となく叱られたのである。誠に先師の教え下さつた通り一粒一飯と雖も此れを大切にせなけねばならんものである。此れを粗末にするのは非常に不陰徳である。依つて御飯を頂く時分には能く其の功の多少と其の来処とを考へて見るがよい。

二付己徳行全缺応供(二つには己が徳行全缺を付て供を応ず)

次ぎに己が徳行は何うかと省みて見よ。吾々が自惚を取り去り静坐黙考して見たならば、吾々は不陰徳許りで徳行は一つもない。全缺であると云ふことが分かる。元来吾々は天の応供を受くるべきである。天は吾々に向かつて吾々の徳行に相應する供養を与へて居る。其の供養以上にとると云ふことは即ち貧である。ところが吾々の徳行は全く缺げて居るから天の応供はない訳である。然し食事をせなければ生きて居ることが出来ないから、仕方がない吾々は盗人をして居るのである。吾々は御飯を頂く資格がないのであるから如何程まづいものでも有り難く頂戴せねばならぬ。あれはまづい、此れは嫌いじゃ、冷飯は厭じゃ、此れには飽いた等、小言を謂ふことは出来ない。然るに寄宿舎や下宿屋で賄征伐等云ふて、少し御飯がまづいと、食つた後で櫃の中へ茶をぶっかけたり、漬物を放り込んだり、櫃の中の御飯を御膳の中へぶち明けたりするものがあるのは、実に言語道断の話である。依つて御飯を頂く時分には能く能く己が徳行の全缺なることを思ひて之れに向はなければならぬ。

三防心離過貧等為宗(三つには心の防ぎと過貧等を宗とす)

ところが吾々は月給を頂戴して居る。月給全部で食うたならば随分甘いものを食うことが出来る。するとつい「人は月給相應のものを食べて居れば宜いのである」等、得手勝手な理屈を付けて美食をしようと云ふ心が起きて来る。此の心は抑も貧慾心である。元来吾々は天の応供を受くべきである。月給も亦応供であるべきである。吾々の徳行は全缺であるから吾々の月給は応供以上である。此れをうまうま受けて、悉く食つてしまふとは何たる貧慾で何たる不陰徳であるまいか。又家長公は何故に斯くも多くの月給を下さつて不陰徳を勧めなされるのであるか。思ふに吾々を赤子の如く思ひ下さる家長公が

吾々に不陰徳をお勧めになる筈がない。これは「お前仲々善くなった」と云ふて吾々をお導き下さる御意志であらうと思ふ。それで吾々が動きもすれば起こす所の金があるから美食をしようと思ふ心は即ち貧慾心である。此れを実行するのは吾々の過である。貪りである。人の道は此の貧慾心を無くして、^{あやまち}過と^{むさぼ}貪りとから離れてしまうと云ふことが肝腎な所である。夫れで吾々が応供以上の月給を頂戴する時は此れを辞退すべきが本旨である。然し辞退をしても御許しが無いと致し方が無いから、其の金を私しない様に為なければならぬ。其の余す所は家の為め、世の為に使ふたり。或いは部下を指導する為に使ふたり。或いは慈善事業等に寄付したりして、決して私すべきものではない。別子銅山等では鉱夫の訓育に使用することは最も善い罪亡し^{ほろぼ}であると思ふ。

四 正事良薬為療形枯(四つには正に良薬を事するは形枯を療が為なり)

御飯は吾々の良薬であつて、其の吾々の口に入るまでには多くの人々が汗水を垂らして出来たのであつて、此れを何等の徳行なくしてうまうまと頂くと云ふことは如何にも不陰徳なことである。吾々の徳行が全缺して居るにも係わらず毎日毎日此れ良薬を頂く所以のものは身体の枯凋^{こちよう}を療^{しか}せんが為めである。然^しば形枯を療せんが為めには徳行が無くとも良薬を頂いてよいものであるか。法律上に緊急状態と云ふことがあつて、餓死に臨んで他人のものを盗んで食べても無罪であるが如く。此れは道德上の緊急状態と云ふべきものであろうか。此のところが大切な所である。此の所に向かつて明瞭なる判断を要するものであると思ふ。其の所で次の句が出来た訳であると思ふ。

五 為成道業応受此食(五つには道業を成^しせんが為に、まさに此の食を受くべし)

徳行なくして良薬を以つて形枯を療医する所以のものは道業を成就せんが為めである。人は道德を成就せんが為めである。人は道德を成就せんが為めに此の世に生まれてきたのであるから。現在徳行が全缺であつても身体の枯凋^{こちよう}を療医して置く必要がある故に、若し何うしても人となることが出来ないと定まれば、此の場合に臨んで寧ろ^{むし}良薬を取らずに死すべきが当然である。何故ならば現在でさへ、不陰徳なるに此れ以上受くべからざる供奉を受けて人となることが出来ないとすれば、^{また}益不陰徳をする訳であるから死すべきが当然である。然らば「自分は到底人となることが出来ないから」と云ふて華嚴の滝に飛び込むと云ふ事は、善いことであるかと云へばそうは云へない。人として生まれて来たれ我が人となれないと云ふ筈がない。吾々は人となるべき天の使命を帯びて居る。此の使命を果たすのは吾々が人として生まれし任務であつて、此れを果たさないのは食べふに勝る不陰徳であるから、此の場合に及んで大発願を起し、道業を成就せんが為めに敢えて今一時不陰徳をして置くと云ふのであるから大した発願である。毎日食事に向かう時分には先ず此の大発願を起し、道業を成就背何が為めに^ま忠さに此の食を受けくべきである。

三匙偈

一口為断一切悪(一口断為す一切悪)

^{さんひのげ}三匙偈は学道の順序を示されたものである。吾々は徳行の全缺なるに係わらず道業を

成就せんが為めに、^ま応さに此の食を受けて居るのであるから、吾々は一口毎に学道を勉めなければならん。先ず一口目には吾々の行から一切の悪事を断ち切ってしまうはなければならん。吾々の行を能く省みると悪いこと許りで善ことは殆どない。であるから先ず第一に悪事を取り去らねばならん。悪事を取り去って然る後に善事に及ぶべきである。悪事を取り去らずに善事を修すとも何にもならんことである。故に学道の第一次に於いては、吾々の行から一切の悪事を断ってしまうと云ふことが肝要である。

三口為修一切善(二口修為す一切善)

一口目に於いて吾が行から一切の悪事を断つことを得たならば、二口目には更に進んで一切の善行を修めなければならん。学道は悪事をせないだけでは足りないのである。悪事をせないのは人道の上では未だイロハである。悪事をせない様になったならば、学道の第二次に於いて一切善行を修業せねばならんのである。

三口為度諸衆生皆供成仏道(三口度諸為す衆生皆供成う仏道)

二口目に於いて一切の善行を修めたならば、悪は一口目で断ったのであるから、吾が行は全部善となる。吾が行が全部善となったならば学道は成就したかと云ふに、未だ未だ此れ^{だけ}では足りない。三口目には諸の衆生を濟度して吾も人も皆^{ともども}俱々に仏道を成就せなければならんのである。幾程善行をなすことが出来ても人を濟度することが出来ないでは、未だ未だ道業を成就したとは云へない。自分独り一切の善を修めても人を濟度せないと云ふのであるならば、此れは恰も自分独り金儲けをして、人に金儲けさせない。又は自分独り美食して他人には之れを与へないのと同じことで、此れ又一種の餓鬼道である。故に自分に一切の善の修業することが出来たならば之を人に及ぼさなければならんのである。即ち学道の第三次に於いては一切の衆生を濟度して、吾も人も皆俱々に仏道を成就することに力を致さなければならんのである。道業は茲に於いて成就せりと云ふ事が出来る。学道は斯くの如く六ヶ敷きものであるから、吾々は食事の度毎に、一口毎に大発願を起こして、吾も人も皆俱々に仏道を成就せんことを期せなければならんのである。(了)

家長公の男爵を拝受せられたるを祝し奉る(50号)

鈴木馬左也

先頃、我が家長友純公は男爵を拝受せられたり。誠に目出度御事也。貴族は何れに於いても尊し。殊に我が国体に於いては一層の栄位たり。謹んで此の御沙汰ありし所以を按ずるに、爵記には単に授男爵とのみあるが、故に確かと其の理由を知ること能はずと雖ども、蓋住友家に於いて二百有余年来、主として鉱山業に従事し、其の間変更することなく万難を排して此の国家有用の事業を継続遂行せられたるは、真正の実業家にして一時の浮利を争ひ、奢侈安逸を貪るの徒と判然区別あり。王政維新後に至って事業一段の繁栄を来たし。営業の種類も増加し、之に依って間接国家社会の福利に貢献したるは勿論。又許多の資財

を抛ち直接に公益に尽力せられたること少なからず。神仏を崇敬し、着実鞏固なる營業方針を取り来たり維新の變革に当たりては頗る艱難を嘗めたりしも、広瀬幸平氏が堅忍なる精神と稀有の才幹とを以って、適當なる進路を取り、遂に復活することを得て古来よりの方針は益發揮せられたり。現代の家長公に至っては時運に依るとは云ひながら、西洋文明の長所を咀嚼応用すること銳意に、徳義を重んじ信用を厚ふする事を主旨とし、且常に心を國家社会に存せられたり。此の如きは固より一市人の精神行為にあらず。而して身貴族たるの人と雖ども此の如きは蓋稀なり。是れ此の度の御沙汰ありし所以ならんか。世或いは徒らに爵位勳章等を希望ものあり。之れを得んが為めには所謂運動を試むるものあり。其の狂暴驚くの外なし。我が家長公は常に風潮の間に洒然たり。而して此の榮譽あり。余輩の特に祝し奉る所以なり。余輩は傭員諸氏と共に家長公の心とし、我が住友家が貴族の栄位を全ふし。皇室の藩屏たるの積責を尽くさるるの一助とも為すれかしと奮励せんことを庶幾す。

※藩屏：守りとなる。垣根。

石ヶ山丈より(50号)

いしはし

嗚呼、我何ぞ幸福なる。俸を受けて此の風景絶佳なる石ヶ山丈に住す。誰か之れを感謝せずして可なりと云うはん。

石ヶ山丈は海拔三千尺の一山腹のみ。我が鉱業所運輸課出張所を置いて、覇や茲に幾多の星霜を閲しぬ。年移り人は変けど更らぬ物は我が燧洋の景色なるかな。げに自然の権威よ、造化の威力よ。我等人類は到底御身の敵ならじ。汽車を通じ、鉄道を架し。以って人類の絶智と誇りたらんも、早や夢と化しなんとす。造化が一夜の細工に、億万年不変の此の宇宙を作りしに比してさても心細か木きかな。

我れ朝夕此の燧洋の快景に対して転た造化の至妙なる手腕に敬服せざる能はざる也。

誰か我が石ヶ山丈より看下したる。燧洋の景を、天下第一と称するを否む者ぞ。や島り見たる海景は天下第一と称する雅人有らば、乞ふ此の処に来て、我が至愛なる燧洋の景としてに対せよ。將に呆然として云ふ処を知らざらん。

春 峰には残の白雪。まだ寒げなれど、軟らかなる風何処ともなく吹き来たりて、遠く海の此の方、菜の花圃。薫香此の処にまで達すらん。青海波洋々として、微沫だにも見へず。漁舟三五、豆の如く小さく眠れる如く静かに浮かべる様の、いかにのどかなるらん。内海通ふ汽船の時に身ゆるも豈旅情を誘ふのよすがとならざらんや。

夏 は遠がに山の上の、荒れに荒れて時には外出もなり間敷けれど、此の処にも造化の妙は尽くされて雲の千化万化。夏ならではと思はるる也。近谷今や蒸々として龍の如き白雲を昇りすかと思れば、遠谷颯として黒雲を冲す。団々として黒きは山の如く。片々として白きは綿の如し。狂ひ飛び消え生ず。一颯の風、雲僅かに去らんとして眺むけば、国領川長蛇の如く縦臥し、新居浜、金子の諸村漠乎として隠見す。恰も之れ

一幅の活面画なり。

秋の紅葉は天下の通語。我对燧洋の光景は海の色を^{あわれ}矜とす。其の青きを見ずや雲動かず、波平かなる海面上。四阪通ひの被曳船、満帆に風を孕んで白鷗の縦陣を形る様の如何にもものどかなる。

陸には豊穰の田稻、黄金の筵を敷きて、青黄の色を競ひ、山には諸樹紅を呈して、艶を争はんとす。嗚呼何等の快景。

冬雪は此の山の名物なり。風^{ひょうひょう}颯々として吹けば、霰先ず来り。雪続いて起こる。白簾を屋前に掲げて、遠く海洋の方を眺むれば、彼方にも雪や降るらむ。密雲低々垂れて気死せるが如し。海上黒点の^{しゅんどう}蠢動するは何ぞ。漁船が帰りを急ぐには非ざるか、あな傷まし。此の寒空を如何にかすらむ。見れば軒端には早やツララ垂れぬ。誠自然に飾る白銀の玉垂れ美しきかな。

^{たま}忽にして夕陽は雲間を漏れて山嶺を射れば、万樹葉落ちたるに、今迄の白雲忽ち変じて、紅炎ゆる桜花と変じ、一目千本の芳野も何のその。早々持て来よ夕食の料を。我が冬ながら座して芳野の春を賞せんと楽しむ有様。炬燵抱へて閉口せる諸君には、到底知り難からむ。

嗚呼、菲文を草して石ケ山丈の風景絶佳なるを伝ふる能はず。^{うら}怨むらくは却って景を汚したらん。乞ふ来たりて此の快景に接せよ。晴雲雨雲敢えて嫌はず。一年三百六十五日、何れの日と雖も、佳ならざるなき。之れ即ち我が石ケ山丈より見たる対燧洋の光景なり。今や我が石ケ山丈は、鉱業所より見て命且夕に迫れり。吾人此の地を去らんとするに当たりて、感慨^ち軽たた噤ずる能はず。即蕪文を草して、将来の記念とするのみ。

※石ケ山丈 「ジョウ」は地形用語では崖を意味する。石ケ山の崖、石ケ山の崩れとなる。石ケ山の地名は現存しないが、昔は石ケ山丈の上のピークを石ケ山と読んでいたのかもしれない。足谷川がV字谷を刻んだ錦繡峰の急傾斜はまさに崖そのものである。伊豆に「発端丈山」がある。

炭が燃え尽きて灰になることを「ジョウになる」と言う。能で言う翁を「^{じょう}尉」というところからである。翁は黒髪から白髪に変わって行く。黒い炭が白い灰となり、白い灰の塊が僅かの衝撃で崩れる様から、地形用語で「ジョウ」が崩落地形、崖、崩れの意味を伴う様になる。「ジョウ」に「丈」「城」の漢字を当てた。

国領川雑感(52号・53号)

可笑子

国領川と言へば^{はなはだ}甚持って広大なる。而かも国と国と相経界せる江河の如き考えを有たる人もあろうが、其の^し実、新居郡と宇摩郡とに堺する一条の河川に過ぎない。然れども此の川は其の源流、別子銅山西北一帯の高嶺と伊良津方面の遠山より流れ来るを以って、一朝豪雨となれば不断涸渴せる^{かわら}積、淵瀬は、満面濁流怒濤の勢い為し、処嫌わず氾濫横流す

るを以って、地方農民の苦情難題を百出する種とも為り。此の川は実に酷涼とも謂ふて然るべしだ。

此の酷涼、否国領川も春風^{たいとう}駘蕩の季節に臨みては処女か。脱兎の如しで春色自から争はれぬのである。立川在所の人家付近に点綴せる野梅は早や盛りを過し。秋霜烈寒の苦楚を経し百樹千草は新緑^{どん}嫩葉を催し、大師堂辺の小丘山恰も文人的に出来て居る小松は緑翠滴るばかりにて、長閑なる春光何と無く浮き立ちて居る。

此の辺の山水天然の規模小なるも其の風致極めて清雅なるは何人も許す所である。奇巖^{ごつとつ}兀突、清流激端。其の状耶馬溪の一部を描写するも余ある。山根の里に入る処に小橋あり。鉄條を以って釣れる。則ち黒の釣橋成なり。橋門に制札あり。日く此の花一枝を切れば、一指を斬るにあらずして、之を通行する者一列幾人より多かるべからず。檐荷^{たんか}の重量何程わ超過す可らずと言ふにあり。去れば常陸山、梅ヶ谷が如き大関は一人以上は渡るべからずと解して然るべきだ。偕ても規模の小なる哉とお笑ひの諸君もあらんが、之は新田と言へる方面より山根の東新校へ通ふ生徒が往来するを本位としたる由にて。雨降り俄かに水勢募りたる時、河を渡る生徒の溺死する者幾多ありて、之を憂いて此の釣橋が設けられたりとの事、左もあるべきことだ。

山根は其の名称の如く、瑞応寺山下に位置せらるるを以って之を唱へたる乎否やは予が独推である。則ち、角野村役場の所在地である。兎も角、角野とは一角に偏安せる村の様に思はるるか。中々そうで無い。其の南東に当たり東平と言ふ住友鋳業所の事業中枢と謂ふべき、人口四千以上の大部落を有して居る。村としては侮り難き大村で、町としても差支は無い位だ。佐世保軍港が明治二十年の頃開拓せらるる時、村としては日本第一と評せられしを記憶せられしか。角野も第四通洞開通せし七八年の後には、全国で有数の位置を占めむるであろう。

国領川に実以って喜ぶべきことと悲しむべき事がある。其の悲しむべきものは粗ぼ前号に載せ置きしが。其の歓喜雀躍の御面相を以って迎へられるものは何である、河川の増水である。端出場吉ヶ谷の発電所より放流する水は大変なものである。唯今では余り電力を要せぬそうだから、先ず三四分の一位の水勢を利用して居るが、漸々^{だんだん}第四通洞の事業が進行するに伴ひては、終に水量の全部^{どんと}を吞吐するに至るであろう。其の暁には国領川は滔々^{とうとう}満々として舟楫を見るに至らん乎。

角野、泉川、金子の各村部落^{いす}は孰れも水利の余沢を蒙ること莫大のものであらうと想像される。従来之れ等の各村は毎歳暮夏季に^{およ}に迨び、旱天打続き田水潤る時は、河川又は堤池の水を引くのである。之れが為め水利組合委員と言ふ法令に基き撰定したる地方の有志家が、水野法典虎の巻を翻^{ひるが}いて夫々差団をするのだ。然れども茲が我田引水で中々委員の裁定に服従し無い。甲村と乙村は利害の関係上各々^{しのぎ}鎬を削り大論判を始めるのだ。場合に依ると竹槍藩旗も出兼ましき事だ。サー一朝談判破裂の日には一村を賭して争闘を起こすこともある。其の結果は突かれたとか、斬られたの、警察だの、裁判だの、監獄に繋がれたの、泣いたり嗟たり其の混乱、騒擾^{そうじょう}は皆一斛一斗の水の配合が不平等とか何とかの衝

突より起こるのである。

現に中萩、泉川、金子村の如き往年大水論起り紛擾多年に渉り、農民の困憊言ふに偲びざる程なるも、騎虎の勢ひ已み難く。訴訟又た訴訟終に大審院の終局裁判間で漕付け、其の解決したる水利(勝利)記念碑が土橋国道より二三丁下りたる鉄道線路の付近に建立せられてある。予も散策の折り、其の碑文を拝見したが、如何にも数年に跨りたる大訴訟でも、勝ても負けても村の訴訟費用乃至貴重の歳月を空しく費やしたのも大層の事であろうと余計の心配をした。

斯く水喧嘩の烈しき地方に俄かに水が殖へると謂ふ事は、神様も仏様も御存じ無ひのだ。況や凡夫の身に於いてをやだが、偕て之には不審も疑惑も何にも無い。彼の軽々たる大水が石ヶ山丈より斜に横はれる。牛腹大の鉄管より幾万ボルトの電光を吐き、其の臀穴より噴出して江河を造ること誠に文明のお蔭で無いか。否、国家事業の余徳であるまいか。是から以後は名物の水喧嘩も無くなり、天下太平、五穀豊穰、家内安全で気楽に行ける出であろうし。実に関係村民は有り難く感謝の意を表する事であろうと信ぜられるが、所謂澆を得て蜀を望むの慾心は今も昔も相変わらず、遠慮会揮せられつつありとはハテ面妖な。

余り水の説法に念が入れ過ぎ、国領川も愈よ荒涼と為り殺気を催したれば之より方向を転せん。其の進み来る所は角野駅より船木村に至る国道を横断する国領橋である。長さ百何拾間もあらし。平常は河水満々たること無く。恰も汐干の瀉の如く僅か中央に二三條の水路ありて、水を踏めば膝際位までにてホンの浅瀬に過ぎないが、若し一朝洪水となれば驚るべき急流と為り、家も流れ人の流亡し悲惨の光景と為るのだ。近き昔を偲べば、彼の三十二年前、別子銅山の大大災害、第三以下立川在所の河岸に瀕したる家屋は大抵流失し、惨死を遂げたる人も無量算無しで、皆斯くの付近に押し流され、或いは海に屍を漂しめ。或いは樹木の枝に胴体を懸けらるるが如き惨酷の最も惨酷を致したる。古戦場の一部であると言へば、何と無く天曇り鬼笑するが如き感が起こる。

※新居郡と宇摩郡の堺：新居郡の東部の川で、郡境の河川ではない。

※五良津方面の遠山：宇摩郡五良津山でなく、新居郡船木の奥山である。宇摩郡五良津山から流れ出るのは関川である。

※国領川の増水：銅山川に中七番堰堤を築き、吉野川水系の水を国領川に分水することで、国領川の流域面積は71%増えた。

※国領川の名称：保国寺領の中の川と天領の中の川の二説がある。伊能忠敬図では立川と表記している。河口が新須賀にあるので新須賀川の呼称もある。

運動だより(53号)

金時小僧

凍雲積雪の籠居時代も過ぎ去りて青葉若葉の活動時代となりたるや。時は六月十七日、

連日の梅雨も今日は隈なく晴れ渡り、微風だになき絶好の庭球日和と思ふ折りから、午後五時より東平小学校校庭にて、諸先生対採鉱調度課連合庭球大会ぞ開かると聞き、何かはさて置き、ハイ見に出かく。大会の事なれば椅子机も程よく並べられ、学校の窓に庭に所狭まきまで八字髭の紳士、花の如き令夫人令嬢ぞ詰めかけられ、景気よく見にける。扱もきてゲームに就て相方の御約束の跡を読み見れば

- 一、審判官の言は神聖にして他人の左右することを得ず
- 二、審判官は相方より一名を出し審判の正確を計る事
- 三、アウトボールの正否にを審判官に告知する為、アウトラインの後方に相手よ一名づつ出し敵方のラインの監視をする事
- 四、審判官及び監視者は、次番の競技者を以って之に当たつること。若し其の責任を怠る場合は、当事者たりとも不服を云ひ得ざる事
- 五、オンラインボールは総てインボールと成す事
- 六、ゲームボスは決選を成す事
- 七、ゲームはサーブとレシーブとを成し、決せざれば今一度なす事

中々喧しいだけ、円満に此の山の奥で近頃になく面白く。結果は採鉱調度連合軍の全勝にきし。学校側の振わざりしは残念至極なりき。終わりに望むで吾等見物人一同より学校諸先生の奮闘を切望する。

東平撰鉱場(54号)

かなめ

海拔二千五百尺、満山緑翠滴る如く。溪流淙々として涼風袂を払ふ。暑さを余所の此の天地、彼の処此の処の谷間には鶯や杜鵑の声高く囀る。此の天然の音楽と競争的に、ゴヲゴヲたる電車の響きに和し、二六時中グワンガタンと不自然なる音響を発して居るのは、我が東平撰鉱場である。現に一日に処理する鉱量は拾七万貫目、鉱車にして約一千車。頓数に直せば六百三拾頓、全て石炭山の様である。之を立方尺に換算すれば一万一千立方尺。例へば六畳敷の室一杯の容積のもの拾五個斗り。毎日呑んでは嚙下し嚙んでは排泄して居るのである。今、此の大消化機？の組織を分解して、茲にせつめいいたさん。

創設は去る三十八年十一月にして、工費二拾余万円を投じ建造されたとのこと。其の当時は此の新開地に一大建設物として光彩を放って居たが、四拾年六月、彼の吾人の耳目をしょうどう聳動せし、別子暴動の為め焼打ちに遇ひ、上部貯鉱場を残すのみにて全部烏有に帰せり。其の後復旧工事五ヶ月にして、現在の仮工場が出来たのである。

四畳半独語(55号)

月坊

端出場から東平へ登る人の十中の八九迄は、近道による様なり。近道可なり。されど近道近道と近道ばかり通る様になったならば、此の世の中は如何であろうか。本門を通らず

して裏門ばかり通る様になったならば、此の世の中は如何であろうか。急げば廻れと言ふことあり。近道には近道でなく遅加道なり。遠道は遠道でなくて疾う道なりと思ふ。

※近道と遠道：鹿森ダムから大休みを過ぎて、直登の近道と周回の遠道に分かれる。近道は第三通洞からの坑水路建設に伴い工事道が近道に変わったと考えられる。遠道の途中には、セリ割、石のベンチがあり、長尾石ケ休場があった箇所と思われる。近道と遠道が合流する地点から、泉屋新道と立川銅山道とが分岐する。

須領に上る(56号)

カハベ

八月の末一日杖をつき鞋掛にて須領にと出かけたり。午後一時頃の炎日を浴びて呉木を下り、藪叢間小路に入る時、一婦人に遇ふ。道をへば懇ろに教え且つ日く「だんな、道にハメが居るから御用心なさいませ、それから私は先日拾参銭で買った赤色の櫛を道に遺しましたから御拾収になりましたら返してください。五銭でも七銭でも上げますから」と、予笑ってうなずきぬ。蜿蜒たる道には大葉子はびこり、岩あり滝あり、小暗き杉林あり。やがて谷底の川に出ず。渡れば電光形の道極めて急。登行頗るぶる難じたれども辺りには萩、葛、曼珠沙華、金水引、其他の小花白赤黄とりどりに咲き乱れ。蟬の声水音に和して自から一種の仙気を帯び往来。かつて人影を認めず寂寞の度浅からず。三時すぎ須領の最高部落に達す。回首すれば東平裏面の家屋積箱の如く雅趣愛すべし。試みに双眼鏡に照せば実景手に取る如九山下の水色亦頗る美。一農家に入りて憩ひ、暫く談話を交わふ。須領には十一戸あり。平家の落武者の末孫などと噂に聞きしが、余裕ある生活上の気楽さは自ずから看取せらるるも、役目柄かかる高地に来る村吏巡查配達夫の御苦勞察すべきなり。家は悉く伊藤姓にて、唯一戸佐藤姓あり。三十年以来かつて伝染的病気なしとは左もあるべし。四囲樂園開け果樹多く、梅、梨、柿、枇杷をはじめ、栗玉、蜀黍、甘藷、田芋、蕪など盛んに作られ。特に藍三叉の栽培見事にて孟宗竹の茂林あり。一部水田も開け居れり。帰りには敷柿の植物を採り、家につきたるは五時すぎなりき。汗を出す事幾升。神気自ずから爽然。双脚の鍛錬頗る快心に覺えたり。ハメにも嘔まれざりしは幸なりしも。婦人の頼みの赤櫛の見付けからず。道を教へし親切に酬ゆるわ得ざりしは返す返すも遺憾なりき。

※記述から考察すると、呉木から河又に下り、河又から清滝の上をトラバース状に須領に向かっている。須領の先は、六地蔵から瑞応寺に至る須領道である。

演武会記(70号)

野鶴子

二月十五日・守勝東平支部の催しに係る演武大会の状況を記せんに、会場は東平高等小学

校室内運動場にして、来会の剣士は庶務課、調度課、駐在警官、守勝別子。東平両支部の諸氏にして開会は正午十二時なりき。審判員は庶務課出張処首席松山重吉、撃剣教師朝井弥太郎、川口重美の三氏にて、本試合に先ち小柳支部長と福田太郎吉とは無刀流の組太刀式を演じ、夫より三本勝負に移り後ち一本試合、五人抜き^{いず}の勝負、源平決戦等にて孰れも平素鍛錬の勇士なれば、其の動作目^{めきま}凄しく、殊に無流の人々なれば、強剣体突り火花を散らし手に汗を握るが如き感ありて、観客をして真剣試合も斯くあらんと多大の興味を有たけり。各勝者には支部長にり賞品を授与し、敗者にも犒^{こうろう}勞として物品を与へらる。閉会は午後五時にして、会員には酒^{いづ}餞を供せられたり。

2. おわりに

会長の新井琴次郎が去った後は、鉾山関係の記載がなくなり、文芸のみになって行った観がある。入社まもない鷲尾勘解治の投稿があったり、鈴木馬左也の特別投稿があったりと、思わぬ紙面に出あった。42号ではP21～P24が、欠ページで「四阪島生鉾吹炉の概要」が読めなかったのは残念であった。昔の人は漢字制限の無い世界で投稿しているので読みづらい漢字がたびたび出て来たが、辞書を引いて読みやすくルビを振った。

創刊当時は、大学の冊子と見間違えるくらいアカデミックな投稿が見られることと想像がつく。創刊号から17号までを探索して是非とも読んでみたいものである。受講生各位の探索に期待を寄せるところである。